

モンゴル語のアクセント

—オートセグメント理論による分析(*)—

ジョウ オ
城生 佰 太 郎
三 上 司

1. 緒 言

1.1. 音韻論的位置付け

モンゴル語のアクセントは bound accent であるが故に音韻論的に無意味なものとなされ、長らく周辺の研究対象として扱われてきた。周知の如く音韻論に於ては示差性の追究が、現存する多数の学派に共通した第一義的な課題であることを思えば、それは当然の結果であったかも知れないが、単にそればかりではなく、示差性という強力な武器が使えなかった場合に、渾然一体となった音声レベルから、音韻論の記述の対象となる社会習慣的に備わった一定の型を抽出し、これに解釈を加えることは、そうたやすい事ではないということも、その一因と考えられる。例えば現代フランス語は bound accent であるが故に研究が進展せず、伝統的な accent d'intensité (強さア)、Pierre DELATRE の accent de quantité (長さア)、Pierre LÉON の accent de hauteur (高さア) の3説が鼎立していて、世界でも屈指の研究人口を有する言語でありながらその本質は未だ杳として知れないままであるという事実などが、上述の事柄を雄弁に物語っているものと思われる⁽¹⁾。

こうした中で服部四郎 (1951) は、モンゴル語チャハル方言の分析を通じて、例えば тэрэр [¹-t's-rē-y(ë)] (車) の単語音調 MHL と stress は、3 mora 3 音節語の特徴として一定した傾向性を有するので、逆にこの音調と stress の配置を手懸りに мэднэ [¹-mɛ-d-në] (わかる) の如き単語の音韻的音節を /mä-dä-nä/ のように画定することができるとして、bound accent も立派に音韻論の研究対象となり得ることを説いている。服部氏の一貫した主張は、その後アクセント素観の提唱に於て見事に結実しているが、小論の筆者も衷心よりこ

の見方を支持するものである。

そういうわけで、この小論は当初服部氏のアクセント素観に立ってモンゴル語を記述することを目的としていた。しかし記述を進めて行くうちに上の枠組みでは、特に我々の調査資料に於て顕著な音調の幾つかが、処理しきれないことに気付いた。そして結論としてこの点を克服するために現時点で考え得る最良の枠組みは、オートセグメント理論 (Autosegmental Theory, 以下 AT と略) であろうとの見通しを立てることとなったのである。

1.2. 資料及び分析の方法

以下に展開される立論の根拠は、直接には1979年3月筆者らが行ったインフォーマントによる調査資料に基いている⁽²⁾。但し間接的には1960年から1978年迄の間適宜収録された12件にのぼる録音資料を用いている。又、対象とした方言は現代モンゴル語ハルハ方言(以下単にモンゴル語と略)に限られている。

資料の分析の段階では筆者らの耳による記述以外に東京学芸大学設置の Pitch scaler (須藤貢明氏設計) 及びペン描きオシロを併用して音響音声学的裏付けとした。

調査語彙は単独で発音された1音節～4音節語とし、それぞれ *indefinit form*, 屈折形、接辞を伴った派生形が含まれるよう配慮してある。尚、録音は一語につき最低2回は行っている。

2. 諸説の検討

AT の適用に先立ち、この章では諸家が開陳してきた学説を概観し、之に若干の検討を加えることとする。

2.1. stress 説

Hangin (1968) に代表される見方で、概略、短母音のみで構成される単語に於ては第1音節に、長母音及び二重母音を有する単語に於ては最初のそれにそれぞれ *stress* がかかるとする説である。但し細部にわたると諸家の説が分かれる。Poppe (1970) は、ax/'axə/⁽³⁾ (兄) *далай*/da'lae/ (海) などは原則に従うが、長母音及び二重母音を2個以上有する単語に於ては *далайгаараа* /dala'e'gaaraa/ (自分自身の海で) の如く、末尾より2番目のそれに *stress* が

落ちるといふ細則を設ける。лүвсанвацдан (1967) は母音の長短に関係なく常に第1音節に stress を認めた上で、дараа/dárá/ (後で) の如く第2音節以下に副次強勢を設けている。又、Stuart (1957) は、морь/'mori/ (馬) хонь /'xoni/ (羊) の如く短母音のみで構成される2音節単語で、しかも第2音節が /i/ で終る場合に限り第1音節に、それ以外の場合には第2音節に stress を認めると言う。以上の諸説をまとめれば表1のようになるが、次にこれらを簡単に検討してみる。

表 1

Stress	短 母 音		長母音及び二重母音
	第1音節	第2音節	
Stuart (1957)	×	○	初出部
лүвсанвацдан (1967)	○	△(*)	初出部
Hangin (1968)	○	×	原則として初出部(**)
Poppe (1970)	○	×	初出部

(*) Дараа/dárá/など第2音節以下に副次強勢を認める。

(**) Далаагаараа/dalae'gaaraa/など、長母音、二重母音を二個以上有する単語では、末尾より2番目に強勢を認める。

先づ Poppe 説では、長母音及び二重母音を2個以上有する単語に細則が設けられているにも拘らず аавараа/'aabaara/ (自分の父によって) の如き型を説明することができない。

次に лүвсан の提唱する副次強勢の一部と Stuart の主張する第2音節の stress は、共に pitch を stress と一視同仁している嫌いがある。例えば хонь と хоньн の関係は、前者に従えば /xóni/, /xóniŋ/, 後者に従えば /xóni/, /xoníŋ/ と記述されることになるが、音声的レベルでは強さが共に第1音節に、高さは хонь では第1音節、хоньн では第2音節に来ることが、耳によって明らかであるばかりでなく、機械によっても確認されている⁽⁴⁾。従ってこれらをも強勢という名のもとに一括して呼ぶからには、そう解釈するに十分な根拠が明示されない限りこれに賛成することはできない。尚、以上の諸点を勘案すれば既に明かなように、Hangin 説にも従い難いということになる。

2.2. Pitch 説

モンゴル語のアクセントを高さのみで捕捉し、強さを排除しようとする見方

に、管見の及ぶ限りでは角道正佳 (1978) の Pitch Unit 説 (以下 PU 説と略) がある。この見方のミソは、音節単位の分析を放棄して、逆に pitch が変化する境目 (これを PU 境界と称する) を分節の単位として利用しようとする点にある。例えば ax は 1 音節単語であるにも拘らず、音調が概略 \widehat{HL} という姿をとる。そこでこれを $\overline{a}x$ と解釈して、PU 境界を a と x の間に有する 2 PU 語と分析し、 $\overline{P}P$ のように抽象化する。音節境界と対比しながら若干の具体例を示せば表 2 のようになる。

表 2

	PU 境界		音節境界	
*P	(実在せず)	(1P)		
$\overline{P}P$	$\overline{a}x$	(2P)	ax	(1)
$\overline{P}P\overline{P}$	$\overline{a}xa\overline{a}$	(3P)	a-xaa	(2)
	$\overline{a}xa\overline{ap}$	(3P)	a-xaap	(2)
$\overline{P}P\overline{P}P$	$\overline{a}xa\overline{apa}\overline{a}$	(4P)	a-xaa-paa	(3)

斯くて PU 境界は、 $\#C_0V_ \dots CV_ \dots CV_ \dots$ の如く抽象化されることとなり、 $\dots CV_ \dots CV_ \dots CV$ で抽象化される音節境界とは、CV をはさんで互に鏡映像の関係にあるということになる。尚、以上の分析を一般化すれば、

- (1) P1 個より成る単語は原則としてモンゴル語に実在しない。
- (2) 末尾より数えて 2 ッ目の P は必ず高。
- (3) 末尾より数えて 3 ッ目の P は、(イ) 語頭なら低。(ロ) 非語頭から高。

とすることができるという。更にこれを mora 分析と比較すると表 3 のようになる。即ち mora 単位によると、同数の mora から成る単語で、末尾より 2 番目が高いか 3 番目が高いかは、当該 mora が母音だけのセグメントで構成されているか否かにかかってくる。換言すれば、pitch の記述には mora 内部の構造迄吟味しなければならないということになって甚だ煩雑になるが、PU 説ではこの点が克服されているという。尚、この説の直接の動機となったものは Street (1962) であると言われているので、併せて参照されたい。

以上が PU 説の要約であるが、次にこれを検討してみる。第 1 に、上の説に従って分析を進めると、結果的に見て服部 (1951) に於ける音韻的音節の分析と殆ど変わるところがないことになるが、思うにこれは角道氏が服部説を専ら

表 3

PU 分析		mora 分析	
*P		*M	
P P	<u>mo</u> <u>prь</u>	MM	<u>/mo</u> <u>ri/</u>
	<u>ca</u> <u>hьH</u>	MMM	<u>/sa</u> <u>i-y/</u>
P P P	<u>y</u> <u>л^v</u> <u>c(*)</u>		<u>/u</u> <u>la</u> <u>sa/</u>
	<u>a</u> <u>xa</u> <u>ap</u>	MMMM	<u>/a</u> <u>xa</u> <u>a-ra/</u>
	<u>ca</u> <u>hьxa</u> <u>H</u>		<u>/sa</u> <u>i-xa</u> <u>ɣ/</u>

(*) 右肩の V は、母音挿入規則 (角道 1978 参照) による。

mora 分析の側面のみによって捕捉したためではないだろうか。服部 (1951) では、mora と音韻的音節の二本立てとなっており、pitch は専ら後者によって分析されている点を見落してはならない。(後述 2.3. 参照)

第 2 に、一般化に際して例えば「末尾より 2 番目の P が必ず高い」(第 2 項) というような記述の仕方をしてい
るが、注意を要する。具体例をひ
けば、амгалан (平和) には、
a | мга | ла | H のほかに a | мга | ла | H
もあり、нулимас (涙) にも
ну | ли | мас 以外に ну | ли | мас が
併存しているといった具合で、仲
々一筋縄では行かない。更に初頭
の P から次末の P 迄上がりっぱなし
という例もある。(図 1 参照)

勿論これらを頻度による傾向性を
を根拠として、周辺の variant
と解釈し、排除する立場もあろう
が、我々は少なくともそこに一定
の社会習慣的型が認められる以上
は、これら全てを記述の対象とす
る立場をとるので、上のような記
述の態度には賛成できない。

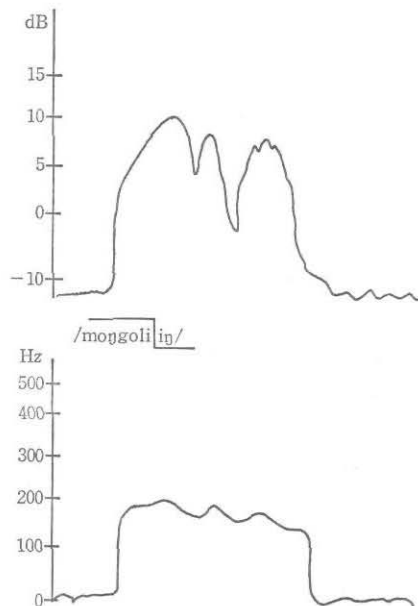


図 1

第3に、前節に於ける stress 説の検討と同様の主旨により、高さ以外の音声的情報を無視する事は、充分納得の行く説明が与えられない限り首肯できない。

尚、上に述べた以外に、PU 説には他の多くの言語に適用した場合の説明妥当性という観点からも問題がありそうだが、その辺りの検討は別の機会に譲らなければならない。

2.3. stress & pitch 説

Владимирцов (1929), 服部四郎 (1951), 小沢重男 (1963), Porpe (1965), Sanzheyev (1973) などに見える説である。このうち Владимирцов, Porpe, Sanzheyev の諸氏は、2 音節以上の単語に関して、母音の長短に関係なく第1音節に stress, 最終音節に pitch がかかるとしている。しかし、事實はさ程単純ではなく、例えば前出の амгалан, нулимас, ааваараа, монголын 等々の如く上の説に矛盾する例が多数実在する。

一方服部氏は、以下に引用する如く、服部 (1951) で、かなり詳細な記述を行っている。(但し P は pitch, S は stress の略号として筆者が仮りにつけたものである。)

(P1) 最初の長母音又は二重母音に降り音調が現われる。それに続く部分は低く、先立つ部分は1音節ならば低、2音節以上ならば中。

(P2) 最初の /CVŋ/ に該当する音節が高平。それに続く部分は低く、先立つ部分は中。但しこの音節が最後の音節である場合には高平調の代りに降り音調が現われる。

(P3) 長母音・二重母音・/ŋ/ を含まない単語では、最後から2番目の音韻的音節に該当する部分が高。それより前の音節は中。最後の音節は低。
(但し~~~~線は筆者による。)

(S1) 原則として第1 mora にある。

(S2) 但し第2 mora 以下に長母音又は二重母音がある時には、それらの母音の初めの部分にある。そしてその強めが第3 mora 以下にある場合には、第1 mora に中の強めが現われる。

以上の分析に従って具体例を示すと、хонь は (P3) 及び (S1) が適用されて /'xo-ni/ (音調は HL, 音韻表記は服部氏に従う。以下同様)、хонин は (P2) 及び (S1) が適用されて /'xo'niŋ/ (MHL) となってそれぞれ正しい音形を得ることができる。しかしながら монгол (モンゴル) の場合には服部説に従う

と (P2) 及び (S1) の適用された /¹moŋ̄-ga-la/ (HLL) 以外の音形を得ることが出来ないが、実際にはこの型以外にも /¹moŋ̄-ga-la/ (MHL) があり、頻度としては後者の方が圧倒的に高い。又、⁰ч⁰xəŋ (少ない) も、(P1) 及び (S1) の適用をうけて、/⁰ö⁰č⁰ö⁰-xäŋ/ (M⁰HLL) となるが、これ以外にも /⁰ö⁰č⁰ö⁰-xäŋ/ (M⁰HHL) がしばしば観察されるといった具合で、前節にも指摘した如く、このような例は枚挙にいとまがない。

ところで、モンゴル語よりは社会習慣の型が一定していなければならない筈の日本語でも、例えば東京方言の「毎」に二種或は三種の音調が併存しており、モンゴル語程顕著ではないにせよ、この揺れを無視することは不当であることを思わせる。畢竟、自然言語に「揺れ」はつきものであり、だからこそ又言語は変化することを考え併せれば、この動的言語現象を捕捉する理論的枠組みも又 dynamic でなければならない。然るが故に、言わば二枚ごし、三枚ごしの記述を可能にする AT のような枠組みが、特に variant の揺れ幅の大きな言語であればある程威力を発揮するのである。後述するように AT の枠組みに従えば、上の *мөнгөл* に於ける HLL と MHL 等の如き差は、仮定される規則の質と量の差として十分捕捉することが可能になる。

2.4. その他の説

以上で概観したもの以外にも、モンゴル語のアクセントは強さと長さにあるとした Street (1963) や服部氏のアクセント素観を適用した城生佰太郎 (1978) などがあるが、いずれも既に行ってきた種々の検討の中に包含され得る問題を有するので此処では改めて取り上げないこととする。

3. AT による分析

3.1. 理論の概観

AT は、音韻のレベルと音調のレベルを互いに独立したものとして設定し、この2つのレベルの対応関係を明らかにすることによって、音調現象をよりエレガントに説明することを目的とした理論である。実際の分析に入る前に、まずこの理論を簡単に概観しておこう。但し、既にこの論の詳細は、Goldsmith (1976 a, b), Haraguchi (1977, 1978, 1979), 原口 (1976, 1979) 及びそこで言及されている論考に於て明らかにされているので、ここではモンゴル語への適用に際して必要最小限の記述に止める。

従来の生成音韻論では、音調は音韻セグメントの一部を成す周辺のなものであり、独立したレベルを構成するものではないと考えられて来た。しかし、最近の研究により、音韻セグメントに変化が起っても、音調はそのまま保たれるという性質が発見された⁽⁵⁾。すなわち、2つのレベルは互いに独立している訳である。このことから、音調はかぶせ分節素 (suprasegment) ではなく、自律分節素 (autosegment) であるという主張がなされるようになった。したがって、AT では (1) のように、互いに独立した音韻レベルと音調レベルが存在すると仮定する。

- (1) *aggi……………音韻レベル
HL……………音調レベル

(HとLは、それぞれ高いピッチと低いピッチを表わす。また星印(*)は、ここでは強勢を示しているものと仮定しておく。)

音韻レベルは音韻セグメント、音調レベルは音調セグメントによって、それぞれ構成されている。言語の話者は、この2つのレベルを結びつけて発話していると考えられる。この2つのレベルを結びつける最初の操作は、音調対応規則 (Tone Association Rule, 以下 TAR と略) の適用である。この規則は言語ごとに異なるものであり、モンゴル語に於ては、(2) に示すようなものと考えられる。

(2) 音調対応規則 (モンゴル語)

- a. $\overset{*}{V}$ が1つ以上ある場合には、右端の $\overset{*}{V}$ を H と結びつけよ。
b. もし $\overset{*}{V}$ がなければ、右端の V と H を結びつけよ。

(V は音調を担う要素を表わす。したがって無声母音などは V ではない。)

(1) に TAR (2) を適用すると、(3) に示すように対応線 (association line) が引かれる。

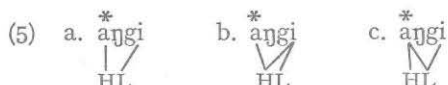
- (3) $\overset{*}{\text{aggi}}$
 \ HL

次に、普遍的な、適格性の条件 (Well-Formedness Condition, 以下 WFC) に従って残りの対応線が引かれる。

(4) 適格性の条件

- (i) a. 全てのVは、少なくとも1つの音調と結び付いていなければならない。また全ての音調は、少なくとも1つのVと結び付いていなければならない。
- b. 対応線が交差してはならない。

しかしよく考えてみると、これだけでは、(5)のように三通りの対応線の引き方が可能である。これらはどれも WFC(3) を破ってはいないと考えられるのである。



そこで、対応線は(4i)を保ちながら、以下に挙げる(4ii)の手順に従って引かれるとすべきである⁽⁶⁾。

(4) 適格性の条件

- (ii) a. 既に結ばれている音調の隣に、結ばれていない音調が唯1つある場合、その音調はまだ結ばれていない全てのVに結び付けられる。
- b. 既に結ばれたVの隣にVがなく、まだ結ばれていない音調が残っている場合、その音調は既に結ばれているVに結び付けられる。
- c. 既に結ばれている音調の隣にVがまだ残っている場合、そのVは既に結ばれている音調に結び付けられる。

(4i)に加えて(4ii)が与えられると、正しく(5a)を選ぶことができる。正しい音調型(5a)は、語頭母音aが高いピッチを担い、語末母音iは低いピッチを担っていることを示している。

以上のように、音韻レベルと音調レベルが幾つかの操作により結び付けられることによって、表面の音調型が決定されるというのがATの基本的な考え方である。この理論に基づいて、以下にモンゴル語の実際の分析を示して行くことにする。

3.2. 単音節語

まず単音節語から始めよう。モンゴル語の単音節語には、次の3つの音調型が観察される。

- (6) a. \underline{ax} (ax) 兄 b. $\underline{a}b$ (aab) 父 c. $\overset{*}{x}a\underline{a}$ (xaa) 何処
 $\underline{a}b$ (ab) 取れ $\underline{i}l$ (yil) 行為 $\overset{*}{s}u\underline{ud}$ (myud) まっすぐな

$\bar{g}ar$ (rəp) 家	$xa\bar{a}n$ (xaan) 皇帝	$\bar{c}alas$ (цaac) 紙
$\bar{c}as$ (цac) 雪	$o\bar{q}r$ (oop) 根本の	$\bar{a}il$ (айл) 家族
$\bar{b}ag$ (бар) お面	$o\bar{q}r$ (oip) 近い	$\bar{i}im$ (ийм) このような

(6b) の音調型は、音声的には $M\widehat{HL}$ と記述すべきであるが、H の前の L は、それが示差的機能を持たない限り、一般に多くの言語で幾分高くなること、そして語末の L は他の L よりも際立って低くなるのが普通であることなどから、M (iddle) は設定せず、L として分析した。尚、(6b) の語は $H\widehat{HL}$ の音調で発音する話者が多いことを指摘しておく⁽⁷⁾、

まず (6a) の型から見て行くことにする。(7a) に示したのは、ax という語の音韻レベルの基底構造と音調レベルに属するモンゴル語の基本メロディーである。

(7) a. ax	b. ax	c. ax	d. axə	e. axə
HL	HL	HL	HL	HL

ここでは、音韻と音調のレベルがまだ結び付けられておらず、独立したままである。この2つのレベルは、最初に、(2) に示した TAR によって、H と右端の母音とが結ばれる (7b)。次に WFC (4) が適用されて、(7c) のように対応線が引かれる。つまり、母音 a は下降調を示す \widehat{HL} という音調を担っている訳である。この語は、時としてシュワ (ə) を伴って発音されることがある。この音形を説明するためには、TAR の後にシュワ挿入規則を立てる必要がある⁽⁸⁾。その場合の派生は、まず (7a) に TAR (2) が適用されて (7b) が得られる。次にシュワ挿入によって (7d) となり、最後に WFC が適用されて (7e) が得られることになる。ここで注意すべきことは、シュワ挿入などによって音韻レベルに変化が起こっても、音調のレベルには何の影響も及ぼされないということである。この2つのレベルは、派生の全段階を通じて、互いに独立性を保つのである。

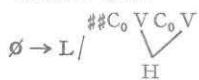
次に (6b) の音調型に進もう。AT では、長母音を短母音の連続として扱う。aab という語の派生を示すと次のようになる。

(8) a. aab	b. aab	c. aab
HL	HL	LHL

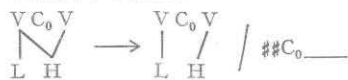
まず TAR (2) によって (8a) が得られ、次いで WFC (4) の適用により (8b) が得られる。この音調型で発話する人も数多く居るが、我々のインフォーマント

は (8c) の型を示している。したがって、(8b) の対応関係を (8c) のように変えるために、語頭の H を L に変える規則を仮定する必要がある。この規則を定式化すると (9) のようになる。

(9) a. 音調挿入規則

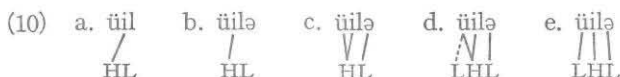


b. 曲線簡単化規則 I



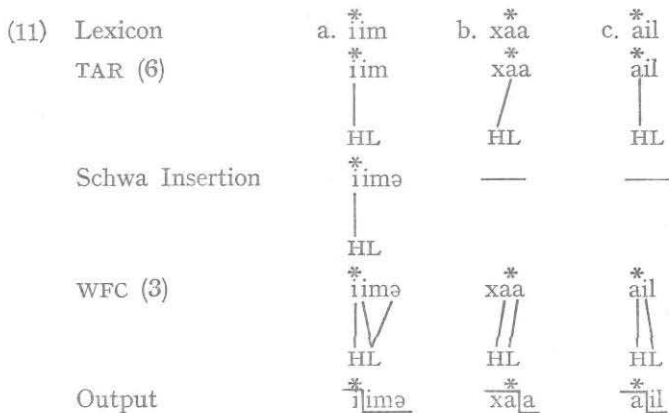
(8b) に音調挿入規則 (Initial L Insertion, 以下 ILI) が適用されると、L が語頭の H の前に挿入される。この L 音調は WFC (4) に従って、自動的に語頭の V に結び付けられる。次いで曲線簡単化規則 I (Contour Simplification I, 以下 CS-I) によって、語頭の LH という上昇調が消され、正しく (8c) を得ることができる⁽⁹⁾。

次に、二重母音を含んだ例も検討してみよう。まず TAR (2) によって (10a)



が、次いでシュワ挿入によって (10b) が得られた後、WFC (4) に従って残りの対応線が引かれる (10c)。ここで、ILI(9a) によって語頭に L が与えられると、自動的に (10d) に示した破線の部分が引かれる。最後に CSI-(9b) によって、正しい型である (10e) が得られることになる。

残る (6c) に示した星印の付いた単音節語の派生を、図式によって示すことにする。



(11) で示した例は、TAR(2) によって、星印のある母音を H と結び付ける点が異なっているだけで、あとは全て前出の例と同様の過程を経て導き出されている。

3.3. 2 音節語

2 音節語の音調型は、次のように 2 つに分類できる。

- (12) a. $\underline{\text{mon}}\underline{\text{gɔl}}$ (монгол) モンゴル
 $\underline{\text{onɔl}}$ (онол) 理論
 $\underline{\text{o}}\underline{\text{sor}}$ (оосор) ひも
 $\underline{\text{ai}}\underline{\text{mag}}$ (аймаг) アイマク (行政単位)
 $\underline{\text{ui}}\underline{\text{lax}}$ (уйлах) 泣く
 $\underline{\text{sa}}\underline{\text{naa}}\underline{\text{a}}$ (санаа) 考え
 $\underline{\text{ga}}\underline{\text{xai}}$ (гахай) 豚
- b. $\overset{*}{\text{fab}}\underline{\text{rik}}$ (Фабрик) 工場
 $\overset{*}{\text{a}}\underline{\text{n}}\underline{\text{gil}}$ (Англи) 英国
 $\overset{*}{\text{fo}}\underline{\text{to}}$ (Фото) 写真
 $\overset{*}{\text{a}}\underline{\text{n}}\underline{\text{gi}}$ (анги) 学年
 $\overset{*}{\text{ba}}\underline{\text{ali}}$ (бээлий) 手袋
 $\overset{*}{\text{ba}}\underline{\text{ab}}\underline{\text{gai}}$ (баавгай) 熊

ここでも、(12a) の語頭の L は、かなり H に近い L である。しかし、前と同じ理由から M を設定せず、L と分析することにする。最初に第 1 音節に長母音を含んだ語から見てゆくことにする。

- (13) a. oosor / HL
 b. oosor / HL
 c. oosor / LHL
 d. oosor / LHL

まず TAR(2) によって (13a) が得られる。次に、WFC(3) によって (13b), 更に ILI(9a) と CS-I(9b) が適用されて (13c) となる。この音調型も他の多くの話者によって発話されている。しかし我々のインフォーマントは、(13d) の型を示しているので、曲線簡単化規則が必要と考えられる。(14) がこれを定式化したものである。

(14) 曲線簡単化規則

$$\begin{array}{c} \text{V} \text{C}_1 \text{V} \\ \diagdown \quad \diagup \\ \text{H} \quad \text{L} \end{array} \rightarrow \begin{array}{c} \text{V} \text{C}_1 \text{V} \\ | \quad | \\ \text{H} \quad \text{L} \end{array} / \text{V} \text{---} \text{C}_0 \#\#$$

次に長母音が 2 音節めに来る例を検討してみよう。

- (15) a. sanaa / HL
 b. sanaa / HL
 c. sanaa / LHL
 d. sanaa / LHL

(13) と同様、TAR(2) によって (15a), WFC(4) によって (15b) が得られる

が、ILI(9a) と CS-I(9b) を適用しても、(15c) となり正しい音調型は得られない。(15c) を正しい音調型 (15d) に変えるためには、(14) とは違った CS が必要と考えられる。

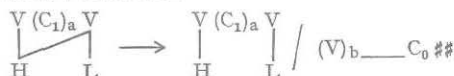
(16) 曲線簡化規則



(16) を設定すれば、(15c) は正しい型 (15d) に変えられることになる。

ここで、(14) と (16) を比べてみると、共通な部分が存在するので、2つの規則は (17) のように1つにまとめることができる。

(17) 曲線簡化規則 II



条件：a > b

この規則が、わずかな制限の違いはあるにせよ、(9b) と鏡映像 (mirror image) の関係にあることは注目すべきであろう。

上記以外の2音節語の派生を図式的に示すと (18) のようになる。

(18)	Lexicon	a. monggol	b. gaxai	c. *fabrik	d. *bäälii
	TAR (2)	monggol	gaxai	*fabrik	bäälii
		HL	HL	HL	HL
	WFC (3)	monggol	gaxai	*fabrik	bäälii
		HL	HL	HL	HL
	ILI (9a)	monggol	gaxai	---	---
		LHL	LHL		
	CS I (9b)	monggol	gaxai	---	---
		LHL	LHL		
	CS II (17)	---	gaxai	---	---
			LHL		
	Output	<u>mon</u> g <u>gol</u>	ga <u>xai</u>	* <u>fabrik</u>	* <u>bä</u> ä <u>lii</u>

したがって、これまでに仮定した規則は、資料の範囲を拡げてもやはり必要なものであり、決してその場限りのものではないことがわかる。また、規則の順序が常に一定であることにも注目すべきであろう。

3.4. 3 音 節 語

3 音節語の音調型も、やはり 2 つに分類できる。

- (19) a. aziltaŋ (ажилтан) 労働者
 botgolon (ботголон) 家畜の仔
 barildaa (барилдаа) すもう
 bjalzuuxaj (бялзуухай) 小鳥
 b. nairamdal (найрамдал) 友好
 *amgalaŋ (амгалан) 平和
 *tāmdägläx (тэмдэглэх) 強調する
 *nūlimas (нулимас) 涙

(19) の音調型は、これまでに提案して来た規則によって、全て正しい型を得ることができる。派生を以下に図示しておく。

(20)	TAR (2)	a. aziltaŋ 	b. barilda <u>a</u> 	c. [*] nairamdal
	WFC (4)	aziltaŋ 	barilda <u>a</u> 	[*] nairamdal
	ILI (9a)	aziltaŋ 	barilda <u>a</u> 	—
	CS I (9b)	aziltaŋ 	barilda <u>a</u> 	—
	CS II (17)	—	barilda <u>a</u> 	—

尚、ここでも他の多くの話者は、(19b) の語を (19a) の音調型で発音していることを付け加えておく。

3.5. 屈折形

さて、この辺でいよいよ屈折形の音調を検討してみよう。モンゴル語では、屈折語尾が付加されると音調型が変化することが観察できる。最初に、語幹に星印を持った語の場合から考えてみよう。(21) がその音調型である。

- (21) a. $\frac{*}{\text{ca}}\underline{\text{las}}$ b. $\frac{*}{\text{caasa}}\underline{\text{las}}$ (цаасаас) 紙 [奪格]
 $\frac{*}{\text{na}}\underline{\text{adam}}$ $\frac{*}{\text{naadmi}}\underline{\text{ig}}$ (наадмыг) 祭典 [対格]
 $\frac{*}{\text{ba}}\underline{\text{alii}}$ $\frac{*}{\text{baalii}}\underline{\text{gār}}$ (бээлийгээр) 手袋 [造格]

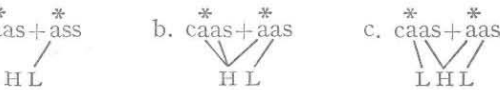
*caasaas について言うと、まず TAR(2) によって (22a)、次に WFC(4) の適用により (22b) のようになり、正しくない音調型を生じてしまう。

- (22) a. $\frac{*}{\text{caas}} + \text{ass}$ b. $\frac{*}{\text{caas}} + \frac{*}{\text{aas}}$



そこで、(23) のような星印を与える規則 (Star Assignment Rule, 以下 SAR) を仮定する。

- (23) 星印付与規則
 $V \rightarrow \frac{*}{V} / Q + C_0 _ VC_0 \#\#$

(23) を仮定すれば、(2a) により (24a) が、次に WFC(4) によって (24b) が派生する。

- (24) a. $\frac{*}{\text{caas}} + \frac{*}{\text{ass}}$ b. $\frac{*}{\text{caas}} + \frac{*}{\text{aas}}$ c. $\frac{*}{\text{caas}} + \frac{*}{\text{aas}}$


ここまでは良いのだが、ILI(9a) と CS-I(9b) が適用されると (24c) のような型が生じてしまう。したがって、ILI(9a) を (25) のように修正しなければならない。

- (25) 音調挿入規則
 $\emptyset \rightarrow L / \#\# C_0 \frac{[-*]}{V} C_0 V$


つまり、第1音節の母音が星印を含まない時のみ適用するように規則に修正を加えるのである。こうすれば、(24b) には ILI と CS-I が適用されず、正しい型が得られるようになる。

次に星印を持たない語の場合を検討してみよう。(26) にその音調型が示されている。

- (26) a. \underline{ax} b. \underline{axad} (axaɔ) 兄〔与位格〕 c. \underline{axaas} (axaas) 同左〔奪格〕
 \underline{ab} \underline{absan} (absan) 取った \underline{abaad} (abaad) 取って
 \underline{noxi} \underline{noxoid} (noxoid) 犬〔与位格〕 $\underline{noxiigos}$ (noxoidros) 同左〔奪格〕

これらは、これまでと全く同様の手順で派生させることができる。(27) はその過程を示したものである。

- | | | | | |
|------|-----------|---------------|-------------------|----------------------------------|
| (27) | SAR (23) | a. ax | b. ax+ad | c. ax+ [*] aas |
| | TAR (2) | ax

HL | ax+ad

HL | ax+ [*] aas

HL |
| | WFC (4) | ax

HL | ax+ad

HL | ax+ [*] aas

HL |
| | ILI (25) | — | ax+ad

LHL | ax+ [*] aas

LHL |
| | CS-I (9b) | — | ax+ad

LHL | ax+ [*] aas

LHL |

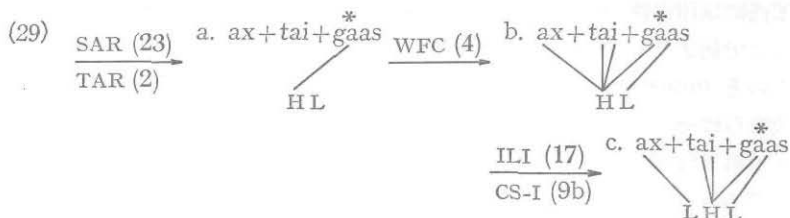
ここで注意すべきことは、SAR (23) の環境である。(23) は、最終の接尾辞が長母音、二重母音を含んでいる場合には常に適用される。しかし (23) の規則に、語幹に星印を含む場合に限り適用されるという条件を付け加えても正しい音調を得ることができる (cf. 28)。

- (28) $\xrightarrow{\text{TAR (2)}} \text{a. } \underline{ax+aas} \xrightarrow{\text{WFC (4)}} \text{b. } \underline{ax+aas} \xrightarrow{\text{ILI (25) / CS-I (9b)}} \text{c. } \underline{ax+aas}$
 $\xrightarrow{\text{CS-II (17)}} \text{d. } \underline{ax+aas}$

つまり、語幹に星印を持たない語の音調形は、(23) の適用を受けなくても正しく説明することが可能なのである。しかし、このように分析すると、SAR (23)

の適用領域を狭くして、規則の一般性を失うことになってしまう。したがって、この解決法は好ましくなく、ここで採用することはできない。

最後に、屈折語尾が2つ付いた場合の派生を示しておく。



3.6. まとめ

以上、ATを概観し、この理論に基づいてモンゴル語の音調分析を試みた。ここで、これまでに述べて来たことをまとめてみると、(i) モンゴル語の語彙は、基底で星印を持つ語と持たない語に二分されること⁽¹⁰⁾、(ii) 基本メロディーは、HL 唯一つであること⁽¹¹⁾、(iii) 次の6つの規則が、この順序で適用されることである。

- (30) a. 星印付与規則 (23)
 b. 音調対応規則 (2)
 c. シュワ挿入
 d. 音調挿入規則 (25)
 e. 曲線簡単化規則 I (9b)
 f. 曲線簡単化規則 II (17)

この規則体系を見ると、(30e, f) は、よく似た働きを持つにも拘らず、鏡映像規則として1つにまとめることができず、最適な (optimal) 文法とは言えないことになる。

4. 残された問題と将来の展望

上に述べた AT は開発途上の理論であるだけに、今後多くの言語に適用することによって適宜修正されつつ発展を遂げることが望ましい。ここではモンゴル語への適用によって明かにされた若干の問題点を指摘して、将来への布石としたい。

4.1. 星印(*)の検討

前章で示したように、ATによる分析の結果、モンゴル語には理論的に見て、基底に星印を持つものと持たないものがあることを仮定することになった。ここで何よりも先づ注目したいのは、prosodic な面で少なくとも marked なものと unmarked なものとの対立を理論的に仮定したということである。何故ならばそれは、従来を通時的の研究の上に立って仮定されてきた積年の疑問である第1音節 stress 説に対する反証の糸口を与えてくれるものと期待されるからである。

伝統的なアルタイ言語学によれば、母音調和、第2音節以下の短母音の曖昧化、子音弱化等の諸現象は、全て第1音節に stress を仮定するに十分な根拠であるとされて来た。しかしながら、城生(1976)でも触れているように、モンゴル語には「iの折れ」と呼ばれる逆行同化現象をはじめとして、母音調和の衰退、現代語に顕著な aab [$\overset{1}{\underset{+}{a}}_1 _B(\check{v})$] ($\widehat{MH-L}$), yġl [$-\ddot{u}'i'k$] ($M-\widehat{HL}$) の如き、長母音、降り二重母音の専ら後半部のみアクセント⁽¹²⁾が置かれる等、上の仮定とは逆の方向を辿る現象が多数確認されている。更に契丹文字解読に関する最近の成果も上の疑問に拍車をかける。例えば蒙古文語の tabu (五)に相当する契丹文字〈𐰺〉は、1975年に中国で発見された許王墓誌で明かにされたところによると、tau と推定されるという⁽¹³⁾。もしこの推定が正しいものとするれば、従来 V+C+V に溯るとされてきた現代語の長母音の一部を、かなり古い段階から一貫して marked な V——長かったか、強かったか、高かったか等は別として——であったと見る有力な根拠とすることができる。これを具体例によって示せば、 даа- (耐える) と дара- (従う) はそれぞれ da- と daga- に溯ると見る。又、 yyr (山) は $\text{ay\ddot{u}la} > \text{ab\ddot{u}la} > \text{a'\ddot{u}la} > \text{\ddot{u}la} > \text{\ddot{u}l}$ の道程を辿るのではなく、 $\text{a\ddot{u}la}$ から変化したと見ることになる。

Kiparsky も夙に指摘しているように、共時的構造に基いて仮定された理論は、同時に通時的構造とも関わりを持つものでなければならない。以上の点から見ても、星印の仮構には相応の妥当性があるものと思われる。しかしながら星印の実体という点になると、曖昧模糊たるの感なきにしも非ずである。これ迄の AT 理論では word stress は全ての言語に存在するものと仮定した上で、特に音調に関わる stress のみを、結論として marked と見なし、星印を与えている。例えば、英語をはじめ数々の言語を分析した Goldsmith, Papago 語を扱った Hale et al. (1977), [+Accent] (\equiv [+stress]) に対応する素性と見る

Haraguchi (1977) などがその典型である。ところが、もしも上の見方をモンゴル語にそのままあてはめると、この言語では stress などが一向に示差的機能を担わないだけに、星印が強さだけでなく、高さ、長さ、或は調音等あらゆる音声の特徴を反映する可能性を有するため、その実体を明示することは困難になる。そもそも marked な——即ち上では星印を付与された——ものとは、何らかの特異性を有する形という意味であり、記憶の面からは unmarked なものよりも多くの負担がかかることと見ることができる。しかるが故に marked > unmarked という史的言語学が明かとした一般的傾向性は、記憶負担の軽減として説明する可能性が開かれるのである。以上の点から、少なくともモンゴル語への適用を通じて確認された範囲では、例えば *üil*, *aab* などが *üil*, *aab* よりも記憶負担の除かれた形——即ち新しい形——であるという仮説を立てることはできても、星印の実体を単なる stress とする見方には賛成できないということになる。

4.2. 音調の検討

AT に於けるいま一つの問題点は、音調レベルに自律性を与えている点からも明かなように、この理論が音調のみによって展開されているという点である。既に Bolinger (1958), Fry (1958) らの音響音声学的研究によって明かにされているように、stress アクセントとされている英語でさえ、その認知に際しては基本周波数の変化が最も重要であり、長さがこれに続き、音の物理的強さになると殆ど意味を持たないということは、良く知られた事実である。しかしながらこのことはただちに音韻理論に於ても、音調のみを取りあげることによって全ての言語に於けるアクセントを解釈することができるということの意味しない。勿論、音調だけで処理できない言語にはこの理論を適用しないというそぶく立場もあるが、より大きな説明力を持たせるためには、現在振子の極にあると目される AT を、少しでも休止状態に引き戻す必要がある。そのためには少なくとも、(1) 音調レベルの自律性、(2) H, L などの実体。の二点の検討が必須であろう。

アクセントが、いわゆる強さ、高さ、長さ等 prosodic な諸特徴によって記述されることは周知の事実であるが、それ以外に分節的な音韻のレベルにも依存し得ることを見逃してはならない。例えば下北方言に於ける 4 類、5 類の二拍名詞のように、第二拍が広母音の「赤、雨、雲」などは $o\bar{o}$ 、狭母音の「秋、白」などは $o\bar{o}$ となって、母音の広狭がアクセントを支配するという例⁽¹⁴⁾など

がその典型である。ATでもこの点に注目すると、前章で仮定した TAR(2), ILI(25), CS-II(17)のように音調に関わる規則でありながら、音節構造や音韻上の情報に依存している規則が存在する。しかも音調レベルの規則が星印付与規則やシュワ挿入等の音韻規則と交互に適用されており、これらから Haraguchi (1977) の指摘にもあるように、音調を扱う部門は文法の音韻部門に属していることが窺い知れる。更に Osburne (1979) は、ビルマで話されているザハオ (Zahao) 語の或る種の音調が母音の長さに密接な関係を持つことから、ATに対する反論として、この音調を分節素として扱うことを提案している。そこでこのような例をも AT で処理するとすれば音調レベルの規則の音韻への依存度は益々高くなることになり、この依存の度合いが理論上重要な意味あいを持つことになろう。

以上の諸点を勘案するに、全ての音声的特徴を統合して得られた服部氏提唱のアクセント素を、小論の筆者はアクセント観としては極めて卓見であると考え、高く評価するものである。しかしながら既に明かにしたように、記述力という点に於ては AT に分があるとしなければならない。従って基本的には AT の記述方針を貫きながらもアクセント素観を反映させるとするならば、上に指摘した二点はおよそ次のように修正されるべきであろう。

- (1) 音調レベルは、自律性を保ちながらも分節的な音韻レベルにある程度依存し得る。
- (2) HからL或はLからHなどに变化する際、その変わり目にあるHは、単に高さだけでなく、長さ、強さ、調音等あらゆる音声的特徴全体の Gestalt を syntagmatic な形で担っているものと解釈する。こうすることによって例えば

$$\begin{array}{c} \text{üilə} \\ \text{|||} \\ \text{LHL} \end{array}$$

無理なく説明することができる。

以上モンゴル語に於ける分析を通じて、ATで主張されている星印の実体、音調レベルの自律性に関する問題提起を行うと同時に、variantの揺れ幅が大きい言語の記述には目下のところATの枠組が最適であるということをも明かしたことになる⁽¹⁵⁾。

〔注〕

(*) 小論は1978年度筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科における「言語学特講(アルタイ語)」の講義内容の一部、及び1979年6月16日に早稲田大学で開

かれた日本モンゴル学会春季大会における口頭発表を骨子として成立したものである。執筆分担を大まかに示せば、第1章、第2章、第4章を城生が、第3章を三上が担当した。但し草稿の段階から両者はお互いの分担に関係なく、全体にわたる議論を充分に尽くしてきた。従って脱稿した現在、その分担領域は必ずしも定かではなくなっている。尚、小論執筆に際し、小沢重男氏には口頭発表に於て、又原口庄輔氏には草稿の段階で一部に目を通して頂き、それぞれ示唆に富む御教示を得ることができた。更に Лувсандоржийн Балдан 氏には、インフォーマントとして御協力を得た。これらの諸氏に対し、此処に記して深謝の意を表する。

- (1) 但し、最近に至って城生 (1981) などの発表が行われている。
- (2) インフォーマントの言語形成期を含めた詳細な情報は、当人の堅い希望により残念ながら公表することができない。
- (3) 音韻表記は、諸家の記述をそのまま転載し、敢えて統一を計らなかつた。そのために正書法を併記してある。以下同様。
- (4) 筆者らの data による。
- (5) このことについては、原口 (1976) とそこで示された参考文献を参照のこと。
- (6) WFC (4ii) は、Haraguchi (1977) によっている。この条件についての詳細は同書を参照のこと。
- (7) このインフォーマントも $\text{v}\bar{\text{a}}\text{l}$ は (b) の音調をとっているが、 $\text{a}\bar{\text{a}}\text{l}$ は (c) であり、語彙によって揺れている。現実の生きた言語の姿とは、正にこのようなものであろう。尚、小論では分節音素に該当するレベルに関して言及を行う余裕がないが、(6a)~(6c) に示したように、長母音は同じ母音の連続、二重母音の副音部は i で解釈してある。また、正書法で言うところの「区別母音字」に関しては、母音字 + r を g , r + 母音字を y で、母音字 + H を ŋ , H + 母音字を n で解釈してある。従って $\text{b}\bar{\text{a}}\text{r} = \text{bag}$, $\text{b}\bar{\text{a}}\text{r}\text{a} = \text{ba}\text{y}$, $\text{o}\bar{\text{H}} = \text{o}\bar{\text{ŋ}}$ (年), $\text{o}\bar{\text{H}}\text{o} = \text{o}\bar{\text{n}}$ (的中する [命令形]) などとなる。
- (8) 議論に支障がないので、シュワ挿入規則の定式化については、ここでは触れないことにする。
- (9) (8b) から (8c) を得るために、3つの操作を仮定することは、原口庄輔氏の指摘による。尚、原口 (1979, fn. 6) を参照。
- (10) 基底で語幹に星印を持った語の音調型は有標であると思われる。すなわち、星印を持たない語の音調型の方がより自然なものと考えられる。
短母音を含む1音節語にも星印を持つ語が存在することが予測されるが、我々の調査した語の中には、 morj (馬) を除いて、例が見つからなかつたので、本論では示さなかつた。この morj は、我々のインフォーマントによると $\overset{*}{\text{m}}\overset{*}{\text{r}}\overset{*}{\text{j}}$, $\overset{*}{\text{m}}\overset{*}{\text{r}}\overset{*}{\text{i}}\overset{*}{\text{ŋ}}$, $\overset{*}{\text{m}}\overset{*}{\text{r}}\overset{*}{\text{o}}\overset{*}{\text{ŋ}}$ と発音されている。
- (11) 音調を利用しない言語においては、基本メロディーの数は少なく、これ迄の研究によれば多くて2つだと言う。原口 (1979, pp. 65ff.) 参照。
- (12) Лувсандорж (1975) によると、降り2重母音の後半部は長いと記されている。
- (13) 1979年度日本言語学会春季大会に於ける小沢重男氏の発表による。尚、西田 (1981) も参照。
- (14) Haraguchi (1977) でも、松江方言や高松方言に同種の現象の見られることが注目されている。

- (15) clark (1978), 服部 (1979) などに見られる AT「批判」は、いずれもこうした本質的な点を突いてはいない。従って小論の筆者は上記駁論にも拘らず ATの真価が些かも減じられてはいないものとする。

REFERENCES

- Bolinger, D.L. (1958). "A theory of pitch accent in English", *Word* 14, 109-49.
- В.А.Импрлов, Б.Я. (1929). Сравнительная Грамматика Монгольского Письменного Языка И Халхаского Наречия, Ленинград.
- Clark, M. (1978). *A Dynamic Treatment of Tone with special Attention to the Tonal System of Igbo*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club.
- Fry, D.B. (1958). "Experiments in the perception of stress", *Language & Speech* 1, 126-52.
- Goldsmith, J.A. (1976 a). "An overview of autosegmental phonology", *Linguistic Analysis* 2, 23-68.
- , (1976 b). *Autosegmental Phonology*. Ph. D. Dissertation, MIT. (Reproduced by Indiana University Linguistics Club.)
- Hale, K, L.M. Jeanne and P. Platero (1977). "Three cases of overgeneration", in P.W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian eds. *Formal Syntax*, 379-416. New York: Academic Press.
- Hangin, J.G. (1968). *Basic Course in Mongolian*. Bloomington: Indiana University Press.
- 原口庄輔 (1976). 「新しい音形理論について」『言語文化論集』、1-24.
- Haraguchi, S. (1977). *The Tone Pattern of Japanese: An Autosegmental Theory of Tonology*. Tokyo: Kaitakusha.
- , (1978). "The tone system of the Kumi dialect: An autosegmental analysis", *Descriptive and Applied Linguistics* 11. 65-85.
- 原口庄輔 (1979). 「日本語音調の諸相」『言語の科学』7号, 21-69.
- Haraguchi, S. (1979). "Tonology of Japanese dialects", in G. Bedell, E. Kobayashi and M. Muraki eds. *A Festschrift for Kazuko Inoue*. Tokyo: Kenkyusha.
- 服部四郎 (1951). 「蒙古語チャハル方言の音韻体系」『言語研究』19, 20号、68-102.
- , (1961). 「アクセント素・音節構造・喉音素」『音声の研究』第9集、1-21.
- , (1973). 「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは?」『言語の科学』4号、1-61.
- , (1979). 「表層アクセント素と基底アクセント素とアクセント音調型」『言語の科学』7号、71-96.
- 城生佰太郎 (1976). 「モンゴル語の母音調和」月刊『言語』5巻6号、53-61. 大修館
- , (1978). 「現代モンゴル語ハルハ方言の超分節音韻論」(筑波大学大学院文芸・言語研究科博士課程講義 Handout).
- , (1981). 「フランス語のアクセント、一オートセグメント理論による分析一」(日本フランス語学研究会第39回例会 Handout).
- 城生佰太郎・三上 司 (1979). 「ハルハモンゴル語のアクセント再考一オートセグメント理論による分析一」(1979年度日本モンゴル学会春季大会 Handout).
- 角道正佳 (1978). 「ハルハモンゴル語のピッチアクセント」(1978年度日本モンゴル学会秋季大会 Handout).

- Лувсанвандан, ш. (1967). Орчин Цагийн Монгол Хэлний Зүй, I. У.Б. (Ш.У.А.)
- Лувсандорж, ж. (1975). Монгол Абианы Дуудлага, У.Б. (МУИС).
- 西田龍雄 (1981). 「契丹文字」月刊『言語』10卷3号、111, 大修館
- Osburne, A.G. (1979). "Segmental, suprasegmental, autosegmental: Contour tones", *Linguistic Analysis* 5, 183-90.
- 小沢重男 (1963). 『モンゴール語四週問』東京: 大学書林
- , (1979). 「契丹文字解読の新段階」(1979年度日本言語学会、第78回大会 Handout).
- Poppe, N. (1965). *Introduction to Altaic Linguistics*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- , (1970). *Mongolian Language Handbook*. Washington D.C.: Center for Applied Linguistics.
- Sanzheyev, G.D. (1973). *The Modern Mongolian Language*. Moscow: NAUKA Publishing House.
- Street, J.C. (1962). "Kalmyk shwa", in *American Studies in Altaic Linguistics*. Bloomington: Indiana Univ. Press.
- , (1963). *Khalkha Structure*. The Hague: Mouton.
- Stuart, D.G. (1957). "The phonology of the word in modern standard Mongolian", *Word* 13, 65-99.